

注(4) 正しくは米方御蔵元と称した。年々領内の貢米を抵当として御用金の調達を命ぜられていた。大坂の炭屋彦五郎・升屋平右衛門・近江日野の中井新三郎が、次々と蔵元となった。士分の待遇を受けたので、店屋敷のほか、別に侍屋敷を与えられた。年始暑寒には登城して菓子を献じ、主君に謁見するのを例とした。年末には、家臣への給与金1万数千両の現金を、城中勘定奉行所に納入した。

注(5) 大坂の富商。寛政7年〔1795〕から伊達家の御蔵元を勤めた。同11年から年々藩の御物置へ金千両宛献納した。升屋の発行した手形を升屋手形と称し、領内で正金同様に通用した。

資料 仙臺風(「河北新報」昭和41年2月2日～3月31日分クリッピング)

仙臺風(「日本庶民生活史集成」第9巻の内)

78. 「野老」とは

問 「仙台の七夕祭と盆祭」(三原良吉著)の「盆棚と供え物」の項に書いてある「野老」とは、何と読み、どんなものなのですか。

答 「仙台の七夕祭と盆祭」に、『十三日朝に……それから仏壇の前に横一文字に細い竹を一本吊り、メヨーガ、ナス、キュウリ、ササゲ、ナンバン、ホーズキ、小さいナシ、リンゴ、コンブを各二つ糸でつないで、竹に振分けに吊り下げる。これには必ずトコロが無くてはならないことになっている。野老はホトケノヒゲなどといって仏さまはトコロのヒゲをつたわって仏壇に上るといわれている。…』

この「野老」とは、「ところ」と読み、やまいも科の多年生蔓草で、その根茎は非常にひげ根が多いので、ホトケノヒゲといって、盆祭の吊り下げ用としてなくてはならないものとされていたのです。

なお、同じ著者の「仙台民俗誌」(仙台市史)第6巻の内)の「歳時」の項の中に『七月十三日(旧)…棚の上に細い竹を一本横に吊り、これにメヨーガ、青ナンバン、ササゲ、枝豆、茄子、胡瓜、夏梨子、ホーズキ、ボンメ(昆布)、ソーメンなどを下げる。この中に無くてならないのは野老で、トコロはホトケノヒゲなどといってホトケさまはトコロを伝わって家に帰るといふ。』とあり、「野老」に「ところ」とルビをつけてあります。「和名類聚鈔」(源順編)卷17には、正宗敦夫編の同書索引の「ところ」で本文に当たると、「藨」〔かい。「ところ」の漢字〕の標目のもとに『和名土古呂俗用名〔ところの国字〕』としてあります。

また、「野老」は、山野に自生するので簡単に手に入ったもので、その根茎は苦味があるが、よく食用とすることがあったものです。江戸時代には、ひげ根のついた根茎を、老人のひげになぞらえて、正月に長寿を祝した風習もありました。「野老」の語源については、「東雅」(新井白石)に、次の

ように記してあります。

『藤トコロ』

倭名鈔〔和名類聚抄〕に。崔禹錫食經の藤。兼名苑注の黄藤。并に読でトコロといひ。俗に用芎字。漢語抄に用野老字。今按〔あんずる〕に所出並未詳と注せり。トコロといふ義不詳。我国之俗其名によりて芎の字を創造〔はじめつく〕りて。読でトコロといふ。宅読でヤドコロといふが故也。其根鬚〔ひげ〕多くして。老人の黄鬚なるを見るが如くなれば。野老の字を用ゆる事。猶海蝦〔えび〕の長鬚なるをもて。海老の字を用ひて。読でエビといふが如くなる也。…』

注(1) わみょうるいじゅしょう。p.118の注(1)参照。

注(2) 新井白石著。享保2年〔1717〕から撰述を始め同4年2月完成。「和名類聚抄」の物名の語源を考証したもの。全20巻48部。

注(3) 江戸中期の儒学者・政治家。名は君美〔きんみ〕、字は済美。木下順庵門人。徳川家宣の時、幕府儒官。幕政に参与し、前代の弊政を改革した。朝鮮信使の抑制、幣制の整備、閑院宮家創立などが主な業績であった。筑後守の官名を受けた。公務に関する備忘録「新井白石日記」や「藩翰譜」「読史余論」「采覧異言」「西洋紀聞」「古史通」「東雅」「折たく柴の記」などの著がある。享保10年〔1757〕5月9日歿、59歳。

資料 大漢和辞典（諸橋轍次）

79. 支倉使節の往路について

問 「宮城県社会科学学習事典」（宮城県郷土学習研究会編）の「支倉常長」の項に『太平洋を九〇日間航海してメキシコのアカプルコに着くと、そこからはスペインの軍艦で大西洋を回り、スペインのマドリッドで国王フィリップ三世と会った。』とあるが、アカプルコからスペイン軍艦に乗り換えたのでしょうか。

答 問題の個所の表現には、極端な途中省略があるようです。アカプルコは、メキシコの太平洋岸の海港です。此処から大西洋に回る航海など、当時はなおのこと不可能な難事であり、常長の一行は、アカプルコで上陸し、メキシコを陸路横断、メキシコ市を經由して大西洋岸に出、サン・フワン・デ・ウルア港に到着、この港でスペイン軍艦に乗り込んだのでした。「支倉常長伝」（支倉常長顕彰会編）に、

『慶長18年〔1613〕9月15日、いわゆる遣欧使節がサン・フワン・パウティスタ号に乗って、ヨーロッパに向け出帆……さて一行の乗った船は太平洋を横断し、一六一四年一月二十五日ノビスパニア